



アマチュアオーケストラ

新交響楽団第112回演奏会

山田 耕筈 「曼陀羅の華」

Kōsach Yamada "Madara no Hana"

ストラビンスキー 舞踊組曲「火の鳥」(1919年版)

I. Stravinsky Suite de "L'oiseau de feu" (1919)

前奏曲 — Introduction

火の鳥とその踊り — L'oiseau de feu et sa danse

火の鳥のヴァリエーション — Variation de L'oiseau de feu

王女たちのロンド — Ronde des princesses

魔王カステイの兇悪な踊り — Danse infernale du roi Kastchei

子守唄 — Berceuse

フィナーレ — Finale

ベートーヴェン 交響曲第5番 ハ短調「運命」 作品67

L. v. Beethoven Symphony No.5 C-minor op.67

I アレグロ コン プリオ — Allegro con brio

II アンダンテ コン モト — Andante con moto

III アレグロ — Allegro

IV アレグロ — Allegro

指揮 山田 一雄

1986年9月23日(火・祝日)午後2時

新宿文化センター大ホール

主催 新交響楽団

山田 一雄

1912年東京生まれ。

1935年、東京音楽学校ピアノ科卒業、37年専攻科修了。マーラーの弟子プリングスハイムに作曲を学び、日本放送協会懸賞1等、ワインガルトナー賞などを得て作曲家としての地位を築く一方、ローゼンシュトックに指揮法を学ぶ。1941年新交響楽団(現N響)補助指揮者、翌年42年、日本交響楽団と改組の際、専任指揮者に就任。マーラーの交響曲第8番、ストラビンスキー「春の祭典」、ベートーヴェン「荘厳ミサ曲」等、多くの日本初演、邦人作品初演を手掛け、日本の音楽界の指導的役割を果たした。

現在、京都市交響楽団芸術顧問正指揮者、新星日響名誉指揮者、日本マーラー協会理事長等をつとめる他、東京芸大、武蔵野音大等で指導にあたっている。

76年紫綬褒章、78年芸術選奨文部大臣賞、84年勲四等旭日小綬章、86年芸術院賞を受けた。84年より当団名誉指揮者。

新交響楽団

新交響楽団は1956年3月に創立されて以来、30年にわたり自主的に運営されているアマチュアオーケストラで、百余名の団員の職業は会社員・自営業・主婦・学生など多岐にわたっている。

創立以来、音楽監督芥川也寸志の指導のもとに、ソビエト及び国内の演奏旅行、ベートーヴェン・チクルス、ストラビンスキー3部作一挙上演等を行なった。

1976年の創立20周年記念演奏会「日本の交響作品展」により、「芥川也寸志と新交響楽団」はアマチュアオーケストラとしては初めて第8回サントリー音楽賞を受賞、以来この邦人作品シリーズは毎年1回ずつ継続されている。また1979年の第86回演奏会以来、名誉指揮者山田一雄の指導により、グスタフ・マーラーの交響曲に取り組み、マーラーシリーズはこれまでに8回を数えている。新響は邦人、マーラーを含め年4回の自主演奏会の他に、公共団体、学校等の依頼演奏会も行ない、アマチュアオーケストラの可能性を最大限に追究している。



二人の山田先生(右 山田耕筰)

「曼陀羅の華」

山田 耕筰(1886~1965)

楽器編成 ピッコロ1、フルート3、オーボエ2、コール・アングレ1、クラリネット2、バス・クラリネット1、テナー・サックス1、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ、タムタム、シンバル、大太鼓、トライアングル、ハープ、弦5部

演奏時間 約8分

使用楽譜 日本放送協会所蔵

山田耕筰は明治19年(1886)6月9日、東京の本郷に生まれた。

今からちょうど100年前というと、ブラームス、チャイコフスキーは生きており、マーラー、R. シュトラウスの主要な作品はまだできていない。一方、我国では、軍楽隊や、小オーケストラなど、演奏団体がようやく形を成すようになってきた。

耕筰は長姉 恒(つね)の夫、英国人エドワード・ガントレットから音楽の手ほどきを受け、西洋音楽に親むようになり、1904年、作曲を志して東京音楽学校(現、東京芸大)に入学した。しかし、当時作曲科はまだ無く、独力で勉強していた耕筰の才能を認めたヴェルクマイスター教授の推薦により、岩崎小弥太男爵の援助を得、ベルリン留学が実現した。1910年、ベルリン国立高等音楽学校に入学、ヴォルフ教授に師事して、古典音楽を規範とする厳格なドイツ流の作曲法の基礎を学んだ。

渡独3年目(1912)、留学を積極的に薦めた美術学校の友人、齊藤佳三^{かそう}が来独、約1年の共同生活の中で、耕筰は齊藤から、詩、文学、美術を学び、また、同時期来独した小山内薫からも多に芸術的刺激を受けた。後年、耕筰は回想記『若き日の狂詩曲』の中で、齊藤との生活によって「芸術家となる真の生活の第一歩を踏み出したのである」と述べている。

その頃、耕筰は卒業作品として、日本最初の交響曲「かちどきと平和」と、合唱と管弦楽のための「秋の宴」を完成し、続いて三木露風の死を主題にした詩「暗い扉」による交響詩をスケッチ中に、齊藤もまた死を主題とした詩「曼陀羅の華」を書いていた。そしてその詩が完成した日、齊藤は父の訃報を受けとった。耕筰はこの不幸な偶然に接した友人を慰めるために、「暗い扉」の姉妹編としてこの詩に基づく交響詩の作曲を思い立った。

詩は象徴詩と副題のつけられた口語自由詩で、曲もまた交響詩といっても、描写的なものではなく、むしろ、芸術、哲学を語りあった最も親しい友の突然の不幸を真剣に受けとめた上で、死に対する畏敬と、友への慰藉の気持ちを込めて作られたものといえる。

冒頭のハープのグリッサンドに続く木管のソロは、ドビュッシー風ではあるが、全体としては、当時耕筰が傾倒していたR. シュトラウスの影響がみられる。

題名の「曼陀羅」は、悟りの境地に達すること、また「曼陀羅の華」とは、「曼陀羅華」^{まんたろけ}、すなわち天上に咲くといわれる架空の花の意味と言えるが、耕筰は自筆のス

コアに「まだらのはな」と注記しており、これは仏教的イメージを稀薄にするための配慮ではないと思われる。

ところでこの曲の完成した1913年には、「春の祭典」も完成、初演されており、音楽界は激動の時代に入るわけだが、耕筰の作風は生涯あまり変わらず、20余曲の管弦楽曲は、後期ロマン派の抒情的面を受けつぎ、形式としては自由なものが多い。すなわち、ベルリン時代の集大成として、厳格な形式による日本最初の交響曲を作曲したのちの、耕筰の管弦楽曲の出発点とみることができる。

初演は1914年12月6日、帝国劇場において山田耕筰指揮、「海軍軍楽隊」、「三越音楽隊」等、約85人で編成されたオーケストラによってなされた。これは1910年、岩崎小弥太の援助によって西洋音楽の普及を目的として発足した「東京フィルハーモニー会」の初めての管弦楽演奏会で、ほかに「かちどきと平和」ワグナー、ビゼーの作品も演奏された。さらに翌年には同会・管弦楽部の常設へと発展し、自作曲のほか、多くの西欧作品も紹介し、日本のオーケストラ運動の第一歩となった。

耕筰は1918年渡米し、2回にわたってカーネギーホールで自作曲及びワグナーの作品を指揮して絶讃を博し、耕筰の音楽が世界的にも遜色のないものであったことを証明している。

このようにして、作曲、演奏活動両面において、日本の管弦楽は、正に山田耕筰から出発したものだが、その後は、ベルリンでの小山内薫との交友により決意を得た国民歌劇の創造を目標とした西洋音楽の啓蒙活動に、超人的ともいうべき業績をはたし、日本楽壇の質的向上に尽した功績は計り知れぬものがある。

ところで話は変わるが、今日の指揮の山田一雄先生は、耕筰大先生とは血縁関係はないが、中学生時代から耕筰先生に心酔していたとの事。一雄先生も作曲を志しながら、東京音楽学校ピアノ科に進み、(作曲科創設は1932年)在学中の処女作「日本の俗謡による前奏曲」が、1937年に日本放送協会賞1位に入賞し、耕筰先生の指揮で放送された。その際、先生の「君の音楽は信用できるから、私は君のすべてを信用しよう」という激励の言葉に一雄青年は涙を流して感激し、以来山田邸に出入りし、オーケストレーションのお手伝いなどをしては、海外旅行のおみやげに当時としては貴重な楽譜などをいただいていた。当時、耕筰先生は既に楽壇の大御所であり、大勢のとり巻きの中で、一雄青年を「これは私の息子です」と言って困らせるような、いたずら心も旺盛だった。一雄先生の述懐によれば、大先生は細やかな愛情をもった無類の優しさの反面、白を黒と言いきってしまうほどの強

さをもって人を引っばってゆく力のある人だった。今でも、大先生の実在は大きく、海外での知名度の高さにはおどろかされるとの事。

音楽への限らない愛情と、桁外れの行動力をもって今日の我が国の音楽の基礎を築いた山田耕筰は、正に聳え立つ巨匠と言える。(上原 誠)

「曼陀羅の華」

齊藤 佳三

太陽が不思議な赤で、空一面を彩った晩でした、
静かなそして寂しい、

月見草が咲くと花辨の音する様なそんな静かな晩でした、

遠くの麓には薄色の宮殿が見えて 燈火がかすかに
中央の窓にのみ揺れて居ります。光らしいものは他に
見えないばかりでなく空が晴れてゐても星さへ出ない
夢の様な晩でした。

暗い湖畔

それでも灰色と黒とを分けてゐる汀の一線丈が白く

見えて、其処に老人が眼を洗っております、

音もなくゆれている波と

音もなくゆれている光と

互に吐息してゐる様なそんな呼應が軒をめぐる雨垂れの様に寄り合つてゐます。

私はわけもなく苦しくなつて来て ただ道を下り初めました、ふとかの不思議な赤で彩った空の事を思ひ出してゐますと

さっきの老人が何んにも云はずにずっと追越して
宮殿の方に急いでゐます、

何んにも云はずに行つて了つたのです。

何故だか私は息が詰まりさうになつてそして後を追はねばならない氣になりましたが

最う影が見えなくなつてゐます、

私は指で土をむしる様な心持になりました 然し
餘程の間すゝり泣きして丁度曼陀羅の華の散つてゐる処に來ますと

宮殿の窓が全体、電燈のスイッチでも振つた様に
急に明るくなりました

『なんて美しいことだらう』

と思ふ間もなくそれがぱつと消えて了ひました、

今度は中央の窓も暗くまんなかなつて居ります。

爪の間からは血が垂れて居ました。

闇

.....

闇の中に曼陀羅の華がほろほろと散つてゐました。

バレエ組曲「火の鳥」 (1919年版)

イーゴル・フョードルビチ・ストラヴィンスキー
(1882～1971)

作曲年代：全曲 1910年 5月

組曲 1911年、1919年、1945年

初演：1910年 6月23日、パリ・オペラ座
出版 (1919年版)

：総譜 J & W チェスター社

パート譜 B ショッツ・ゼーネ社

編成：フルート 2 (ピッコロ持替 1)、オーボエ 2
(コールアングレ持替 1)、クラリネット 2、
ファゴット 2、ホルン 4、トランペット 2、
トロンボーン 3、チューバ 1、ティンパニ、
シンバル、大太鼓、小太鼓、トライアングル、
木琴、ハープ、ピアノ、弦 5 部

ストラヴィンスキーの所謂 3 大バレエの第一作「火の鳥」は、ロシアバレエ団の主宰者ディアギレフの依頼で書かれ、初演と同時にこの作曲家の名を一躍世界に轟かせることになった。恩師リムスキー＝コルサコフ譲りの華麗なオーケストレーション、斬新なリズム感覚、ロシア民謡の多用等が特色を成しているが、後の「ペトルーシュカ」「春の祭典」へと、彼独自の世界を確立する、その前段階に位置する曲と言えるだろう。1 幕 2 場のこのバレエは、作曲家と舞踊スタッフとの綿密な連携や、優秀な舞踊家たちが十分な練習を積んだこと等が結実し、大喝采を以て迎えられた。しかし、ストラヴィンスキー自身は、フォーキンによる振付が複雑に過ぎ、音楽と舞踊の間に若干の不調和を生じていると感じた。聴覚的完全性を意図して作曲した彼には、バレエの動きという視覚的要素そのものが、音楽の完全性をむしろ損う場合があるという、バレエ音楽の宿命を理解せざるを得なかったようだ。それかあらぬか、翌 1911 年には早くも演奏会用組曲を編み、さらに 1919 年には 2 管編成 (原曲は 4 管) の組曲を、1945 年にはまた改訂版を出している。

本日の演奏は、指揮者の意向により、1919 年版によっている。この版は、響きも整理され、音楽的に最も充実している。1910、11 年版は、楽譜上の誤りや、作曲技術上の未成熟が感じられ、また 45 年版は、作曲家のスタイルが変わってしまい、当初の「火の鳥」と全く趣きを変えているので採用されなかった。

この 1919 年版は、2 管編成の、60 名程度のオーケストラで演奏されることを想定の上で、6 ヶ月かかって編曲されたとのことだ。が、これは少々、弦にはづらい編成ではないかと思われる。終わりまで連続して演奏できるように書かれているが、ストラヴィンスキーは 4 楽章風に構成しているので、それに沿って「第 1～第 4 曲」と呼ぶことにする。

第 1 曲「序奏」。不死の魔王カスチェイが支配する魔法の園を不気味に表現する。やがて火の鳥が登場して踊りだす (「火の鳥の踊り」「火の鳥のヴァリエーション」)。

——火の鳥は、イワン王子に掴まえられるが、魔法の羽根を彼に与えることで、放してもらう。

第 2 曲「王女たちのロンド」。カスチェイの城に幽閉される 13 人の王女たちを描く。イワン王子は、その中で一番美しいツァレヴナに恋をする。

——王女たちを救うべく、城内に突入した王子だったが、カスチェイの手下の妖怪どもに捕えられてしまう。そこで王子は、例の羽根を取り出す。と、火の鳥が現われる。

第 3 曲「魔王カスチェイの兇悪な踊り」。火の鳥の魔法により、カスチェイとその手下どもは、狂ったように踊り出し、やがて疲れてバタバタと倒れてしまう。

第 4 曲「子守歌」。火の鳥の子守歌により、悪党どもは眠ってしまう。その隙に、カスチェイの不死の秘密、魂の入った卵は、王子によって割られ、カスチェイは死ぬ。今や悪しき魔法はすべて解け、平和が訪れる (「終曲」)。喜びの音楽が高らかに響きわたって、全曲を閉じる。
(島田清純)



世界の名器直輸入販売

どうぞ電話でお問合せください。

NERO MUSIC CO., LTD.

〒150 東京都渋谷区渋谷 2-9-10 (キングビル)
TEL.400-7466,

営業時間 平 日 AM10:00～PM8:00
日 祭 日 AM10:00～PM6:00

いま、風のデュオが聞こえています。



JASRAC

日本音楽著作権協会
理事長 芥川也寸志

交響曲第5番ハ短調 作品67 「運命」

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770～1827)

作曲年代：1808年

初演：1808年.2月22日. アン・デア・ウィーン劇場

出版：パート譜 1809年4月 プライツコプフ・ウント・ヘルテル社

総譜 1826年3月 同社

献呈：ロプコヴィッツ侯並にラズモフスキー伯

編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦5部 但し4楽章のみピッコロ1、コントラファゴット1、トロンボーン3を追加。

運命については、今更多くを語るまでもないだろう。ベートーヴェンの側近の、アントン・シントラーが、「ベートーヴェンは、この曲の冒頭について、運命はかく扉をたたき、と語った」と伝えた（真偽は定かでない）ということや、「苦悩を突きぬけた歓喜」とか、ハ短調という調性の持つ悲劇性とか、第6番「田園」などと一緒に行われた初演は、プログラムが長過ぎたり、会場が寒かったり、オケと感情的対立があったりで、どうもよろしくなかったというエピソードなど、あまりに有名なものばかりだ。この曲自体の作品としての充実した内容も、ゲーテをして「これはもはや音楽と呼べる代物ではない」と言わしめた程、強い主張と意志を音に表現しようとしたベートーヴェンの面目躍如たるものがある。

その一方、曲の完成度を高めるため、この作曲家は補筆と改訂を繰り返し、そのことが、この曲を「正しく」演奏する上でのいくつかの謎（例えば、反復や楽器法等）を生ずる原因となっている。つまり、却って不完全な楽譜を残す結果となってしまった訳で、なんとも皮肉な話である。が、何が「正しいか」を度外視しても良さそうな程(?)、演奏の可能性を幅広く含むこの曲の大きさは、またさらに大きなものと言えるのかもしれない。

ところで、上述の初演を行ったオーケストラは、メンバーの大部分がアマチュアであったという。当時のウィーンのアマチュアとは、どのような水準にあったのだろうか。それ相当の水準にあったのではあろうが、しかし例えば、ベートーヴェンの第3番や第5番のような、剛性の、激しく、力強い音楽の世界を理解し、表現する余裕があったとは思えない。第3番が世に出たのが、やっと4年前、という時代なのだから。ただでさえ頑固で短気なベートーヴェンである、オケに激怒し、悪態をつきまくったとしても、想像に難くない。これは、作曲家と

オケの双方にとって、気の毒なことではあった。

さて、今日のアマチュアの演奏はというと、とかく精神論やら表現意欲だけは旺盛だが、それが空回りしてしまう傾向がなくもない。特にベートーヴェンなどは、気合いで押し切ってしまうような演奏も少くないが、これは、アマチュアの大変な誤解ではないだろうか（尤も、180年前のウィーンのアマチュアにはこれが欠けていたのかもしれない）。音楽には、それを語るための適切な語法があり、それを無視しては、最後の一步を音楽の核心に踏み込むことはできない。そのことを、アマチュアの我々が口に出して反省する時代がやって来たように思う。

そして、そんな現在の我々が、至高のベートーヴェンを最も高いところで見つめる指揮者として、真にベートーヴェンを振れる指揮者として、真先に名を挙げるのが、マエストロ・ヤマダその人である。1979年以来新響に、年1～2回の割で定期的に指揮していただいている山田一雄先生（当団名誉指揮者）の音楽は、枯れるどころか、ますます瑞々しさを増し、どのような古典的名曲にあっても、そのスタイルを見失うことなく、しかも新鮮な感動に満ち溢れている。山田先生の棒で演奏できるという、この贅沢な喜びを、我々のようなものたちが味わわせていただいていたのかしら、などと、当初は戸惑いもあった。しかし、「アマチュアには、アマチュアならではの『熱』のようなものがあるからいい」という先生のお言葉に、必要以上に勇気づけられ、汲めども尽きぬ音楽の興趣に身を任せることをよしとするのである。「新響30周年間の曲目の中に、是非とも山田先生のベートーヴェンを入れたい」これが、いつしか団員たちの熱い希望となって昂まっていた。

さらにまた、この「第5番」は、実に30年前の第1回演奏会で取り上げた曲なのであった。素人の単なる楽しみとしての音楽でなく、真に音楽を愛し、追求し、磨き上げ、訴えたい、そんな理想を掲げて最初にとりあげたこの曲には、新響にとっても特別の感慨がある。30年という歳月の中で、我々はいろいろなものを積み上げて来たが、考えてみると、「第5番」と共に歩み出した頃の夢と気概を育ててきた歴史ではなかったかと思われるのである。

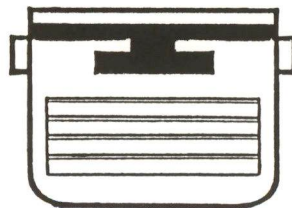
30周年をやっと迎えた「若いオーケストラ」新響と、50余年のキャリアを重ねて益々若々しく冴えわたる山田一雄先生。本日は、我々の、巨匠との幸福な出会いの結実であると同時に、ここからまた未来へ向かって求め続けるものを考える、新たな出発点となるはずである。

(島田清純)

創業 1901年

クロサワ

(株式会社 黒沢商店)



ソーシャル コミュニケーションのための
事務機とグリーティングカードの専門店



英文タイプライター

日本語ワードプロセッサ

世界のグリーティングカード

高級ファッション・ステイショナリー

東京・ギンザ6丁目角 (松坂屋前) 03(571)8441 (代)

COSMETIC SURGERY

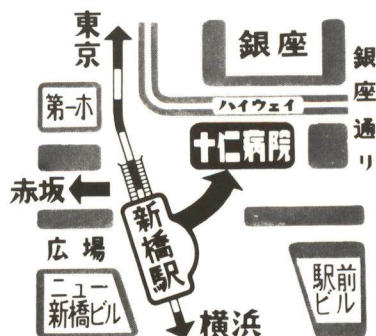
美容外科

(眼・耳鼻咽喉・歯・皮膚科)

東京・新橋駅(銀座口)前

地下鉄銀座線5番出口

日・祝日も診療 入院設備有り



院長
梅澤文雄

十仁病院

☎ 03(571)
2111~8

情報 は 友 だ ち

RICOH

リコーのパーソナルワープロ《マイリポートシリーズ》
3つの個性で、新発売。

家庭のテレビ画面で入力・編集可能

3.5インチフロッピーディスクドライブ内蔵



マイリポートJP50D

本体標準価格

(ACアダプタ、アプリケーションフロッピー付) 118,000円

マイリポートJP30D

本体標準価格

(ACチャージャー付)

69,800円



7色印字カラープリンタと
大型液晶ディスプレイ



マイリポートJP70D

標準価格(本体+カラープリンタ)

158,000円

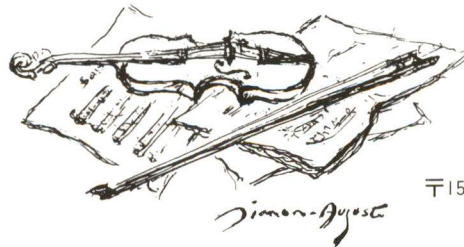
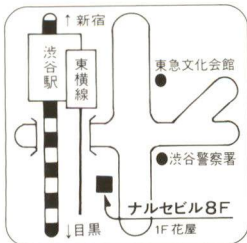
日本語パーソナルワープロ

My-REPORT Series

〒107 東京都港区南青山1-15-5 Tel.03(479)3111 **リコー**

銘器との出逢いはコトで……

●営業時間
10:00～19:00
日曜祭日は休み



弦楽器輸入・販売・修理・調整

株式会社 コト 渋谷店

〒150 東京都渋谷区渋谷3-18-7 ナルセビル8F

TEL.(03)498-7460

185 BD. VINCENT AURIOL, 75013, PARIS, FRANCE

TEL 4535-2261

123 PRINCESS COURT QUEENSWAY, W2, LONDON, ENGLAND TEL 221-6966

今後の演奏会の予定

●第113回演奏会

11月30日(日) 2時 東京文化会館

指揮: 芥川也寸志

日本の交響作品展10「新響と30年 芥川也寸志」

オスティナータシンフォニカ エローラ交響曲

弦楽のための三楽章 交響曲第一番 他

●第114回演奏会

(サントリー音楽財団コンサート)

1987年2月1日(日) 2時 サントリーホール

指揮: 芥川也寸志

「サントリー音楽賞受賞者シリーズ」

平尾貴四男・早坂文雄・小倉朗・伊福部昭(予定)

●第115回演奏会

1987年4月5日(日) 2時 東京文化会館

指揮: 芥川也寸志

「中国の音楽家たち」(予定)

●第116回演奏会

1987年6月21日(日) 2時 サントリーホール

指揮: 山田一雄

マーラーシリーズ9

アマチュアオーケストラ

